

Keiba Global Front Line

競馬グローバル・フロントライン

競馬の最前線で活躍する馬や人をご紹介します



合田 直弘

レパーズタウン競馬場を舞台に行われた「2025年ダブリン・レーシング・フェスティバル」の、開催初日(2月1日)のエスタヴィアル」の、開催初日(2月1日)のメイン競走として行われたG1アイリッシュゴールドC(芝24F70Y)を制し、レース史上3頭目となる3連覇を達成したギヤロパンデシヤン(騾9,父ティモ)が、今月のこのコラムの主役である。

フランス産馬で、4歳となった20年の5月にパリ近郊のオートイユ競馬場で行われたハードルの条件戦(芝3600M)でデビュー。ここを制し、緒戦勝ちを果たしたのがギヤロパンデシヤンだ。ちなみに父のティモスは、2010年のG1ジャパnC(芝2400M)に出走。15着となった馬で、記憶の片隅にその名を留めている競馬ファンも、おられることと思う。

デビュー勝ちから遡ること2か月前、この年のチエルトナム・フェスティバルで、所有馬バーニングヴィクトリーがG1C Bトライアンフハードル(芝16F179Y)を制し、馬主生活7年目にして嬉しいG1初制覇を果たしたのが、ダブリンを拠点とする実業家グレッグ・ターリーさんと、その妻オードリーさんだった(馬主名義は夫人名)。バーニングヴィクトリーを管理するウイリー・マリンス調教師に、「良い若駒がいたら買いたい」と依頼し、これに応じてマリンス師が見つけてきたの

が、ギヤロパンデシヤンだった。

直接交渉で売買が成立し、ターリー夫妻の所有馬となったギヤロパンデシヤンは、即座にマリンス厩舎に移籍。20/21年シーズンからアイルランドを拠点に走るようになった。

最初のシーズンはハードルを5戦。パンチエスタウンのG1アイリッシュミラーノヴィスハードル(芝24F)を含む2勝をあげた。

翌21/22年からステイブルチエイス(芝21F61Y)を含む3勝をあげ、戦線の前線へと台頭した。

22/23年の2戦目となったのが23年のG1アイリッシュゴールドCで、同馬にとりては初めての3マイル戦だったこのレースを8馬身差で快勝。ギヤロパンデシヤンは続いて出走したチエルトナムのG1ゴールドC(芝26F70Y)も制し、路線の頂点に立った。

このシーズンの最終戦となったG1パンチエスタウンゴールドC(芝24F30Y)が2着、23/24年シーズン初戦となったG1ジョンダーカンメモリアルチエイス(芝20F150Y)3着と連敗を喫したが、その後は、G1サヴィルズチエイス(芝24F)、24年のG1アイリッシュゴールドC、24年

のG1チエルトナムゴールドCと3連覇。

その後、シーズン最終戦となったG1パンチエスタウンゴールドCが2着、24/25年シーズン初戦となったG1ジョンダーカンメモリアルチエイス3着と、1年前と全く同じ轍を踏んで連敗したが、24年12月のG1サヴィルズチエイスを制してこのレースの連覇を果たすと、2月1日のG1アイリッシュゴールドCも、1号障害飛越後に先頭に立つと、その座を一度も譲らずに逃げ切り、通算11度目のG1制覇を果たした。

ギヤロパンデシヤンの次走は、3月14日にチエルトナムで行われるG1ゴールドCの予定。ステイブルチエイス3マイル路線の最高峰と位置付けられたこのレースを勝てば、ゴールデンミラー(1932年から36年まで5連覇)、コテージレイク(48年から50年まで)、アークル(64年から66年まで)、ベストメイト(02年から04年)に続く、レース史上5頭目の3連覇となる。

ブックメーカー各社はいずれも、ギヤロパンデシヤンに2倍を切るオッズを提示し、圧倒的1番人気に支持しているが、果たして、快挙達成がなるかどうか。3月14日のG1ゴールドCは、競馬ファンならば絶対に見逃せない一戦と言えそう。